マズローの欲求階層説と臨床社会学

小　高　良　友

［1］はじめに

著名な心理学者 A.H. マズローの「欲求階層説」に私が出会ったのは、社会福祉士・精神保健福祉士国家試験の共通科目のひとつ「心理学（現「心理学理論と心理学的支援」）」の国家試験過去問題においてである。当初は、こんなものを勉強して何になるのだろうか、社会福祉士や精神保健福祉士の仕事にどんな関係があるのだろうか、と私は全く理解できなかった。それでも、この欲求階層説はほぼ毎年のように何らかの形で社会福祉士・精神保健福祉士国家試験に出題されている。これは試験向きの出題しやすい内容なのだろう、ぐらいの認識しか私にはなかったのだ。

そんな思いを見事に破ってくれたのが、「いとう総研」代表の伊藤利洋による社会福祉士受験対策講座での講義であった。伊藤によれば、マズローの欲求階層説はケアマネージャー（介護支援専門員）試験では必ず出題される基本事項とのことである。ケアマネージャーは、介護保険の利用者個々にケアプランを作成する。そのさいマズローの欲求階層説がとても役立つからだそうだ。利用者個々人がケアプランに基づいて介護保険を利用できる予算は介護度に応じて限度額が異なるため、ケアマネージャーはケアプラン内容に優先順序をつけなければならない。最も優先させなければならないことは何か、次に優先させることはなにか、これを考えるときに、マズローの欲求階層説が役立つわけだ。個々の利用者のニーズが、マズローの欲求階層説と照らし合わせて現状でどこまでが満足されているかをまず見極め、満足されていない部分を次に見極めて、それを欲求階層説に照らし合わせてケアマネージャーが優先順序をつけるのだそうだ。伊藤はここまで詳しく解説されなかったが、おそらくそういうことだろう、と私は解釈した。

これは、私にとって「目から鱗」状態であった。そうか、このように役立つのであれば、マズローのあの欲求階層説はとても大切であるし、福祉士試験で出題されてもおそらく意味があるのであろう、と私は納得した次第だ。

私は、勤務校である東海学院大学で、「臨床社会学」という講義も担当している。本学ではこれは、総合福祉学科の学生と心理学科の学生の専門選択科目になっている。総合福祉学科の大半の学生は卒業後に社会福祉士や精神保健福祉士というソーシャルワーカーとして「相談業務」に就くことをめざし、心理学科の学生の大半は、卒業後にカウンセラーとして「相談業務」に就くことをめざしている。それぞれの基盤となる学問や手法に違いはあるものの、両者は「相談業務」という点では共通しているため、両学科の学生たちは「臨床社会学」にも興味を示して受講するものが出てくる。私は、マズローの欲求階層説がケアマネージャーにとって大事なのだと心から納得はしたものの、ソーシャルワーカーやカウンセラーにとってマズローの欲求階層説がどのように大事なのかを当初は実感できていたわけではなかった。そのため、ケアマネージャーにとっての欲求階層説の大切さを自覚してからもしばらくは「臨床社会学」の講義でマズローの欲求階層説に触れることはなかった。ところが、ここ２年の間に、マズローの欲求階層説が「臨床社会学」のなかで私が講義してきた内容に随所で新しい視点を与えてくれることに気づくようになり、ケアマネージャーだけではなく、ソーシャルワーカーやカウンセラーにとってもマズローの欲求階層説が役立つような気持ちになってきた。以下では、どのように役立ちそうなのかをいくつかの節で論じてみたい。また、それらの節に入る前に、マズローの欲求階層説とはどのようなものかを次節でまず簡単にまとめておこう。

［2］マズローの欲求階層説とは何か

私は心理学を専門とする者ではない。マズローの欲求階層説については、社会福祉士・精神保健福祉士の国家試験に出題されている内容ぐらいの知識しか私にはない。その範囲で臨床社会学との関連を論じる資格などないのではないか、と何回か考えてもみたが、国試に出題される内容は誰もが文句を言わないような「通説」として了解されている内容なのであるから、それを基に何かを論じても一定の意味はあるのではないか、と自分を納得させてこの論考を書いている。

それでも、翻訳でではあるがマズローの欲求階層説がほ

ぼ原型[1]どおりに収録されているマズローの『人間性の心理学』[2]は全文を読み、マズローの著作の全体像をつかむために、これも翻訳でではあるがマズロー研究者のひとりであるフランク・ゴーブルの著作『マズローの心理学』[3]も数回読んでいる。その上で、教科書的な通説的知識に基づきまずは自分が今論じてみたいことを整理してみても一定の意味はあるのではないか、と思えてきた。

マズローの欲求階層説そのものについては、私のように臨床社会学との関連についてではなく、階層説そのものの解釈などでもいくつも論文が書けそうなものなのかもしれない。しかし、それをやることは当初の私のねらいではない。それは必要があれば今後やるとして、今は、マズローの欲求階層説の通説的部分だけをまずは紹介するにとどめて、本稿は先を急ぎたい。

社会福祉士・精神保健福祉士国家試験のために用意されているテキストに掲載されている内容は、誰かから異議を唱えられることがないと考えられる通説的理解だと仮定して、それをほぼ引用する形で、マズローの欲求階層説を紹介してみよう。

「欲求は…生理的欲求と社会的欲求の２つに分類しただけでは、その性質や相互の関連性をとらえづらいこともある。そこで、マズローは、1970 年に欲求を二つの水準と五つの階層に整理して示す、欲求階層説を提唱した」[4]

「欲求階層説に示される五つの欲求は、ピラミッド状に基底部から上層へと積み上げられていく。すなわち、一次的欲求の『生理的欲求』は最も基底部の層にあり、ほかのあらゆる欲求よりも最優先される。それが満たされて、より上層の欲求である二次的欲求が派生していく。基本的であり、かつ、人間におおむね共通するものから順に、『安全・安定の欲求』、『所属・愛情の欲求』、『承認・尊重の欲求』と下部より形成されていき、そしてもっとも高次とされるのが『自己実現の欲求』である」[5]

「衣食住足りて礼節を知るという言葉にも示されているように、この階層モデルは、まず生存に不可欠な要素から欲求が始まり、次第により人間らしい社会的な欲求が高まっていくことを表している。本能的な強い欲求から、個人の気持ちのもちようが反映される意識的な欲求へと質を変えていき、最終的には自己実現の欲求が生じてくる。これは自分のもっている能力を活かしたい、自分らしさを何らかの形で発揮したいというような気持ちである。高次になればなるほど生得的な欲求ではないので、欲求は個人的なものとなり、また、欲求の強さにも個人差が生じやすい」[6]

「下位の欲求がすべて満たされないと、より上位の欲求が生じないということはない。例えば、戦争などで身の安全がおびやかされていても、愛情の欲求はある。食べるものが満足になかったとしても、自己実現を求め得る」[7]

「なお、自己実現を成長欲求と呼ぶのに対して、下位の４段階は欠乏欲求と呼ぶこともある。人に認められたい、大事にされたいという承認・尊重の欲求までは、すべて何か欠けることで欲求不満状態を引き起こすからである」[8]

以上が、マズローの欲求階層説についての社会福祉士・精神保健福祉士試験テキストの該当部からの引用である。以上の内容のうち、これから本稿でかなり注目される内容となる部分について確認し直してみよう。

①マズローの欲求階層説において、最下層の第１層は「生理的欲求」、第２層は「安全・安定の欲求」、第３層は「所属・愛情の欲求」、第４層は「承認・尊重の欲求」、第５層は「自己実現の欲求」である。
②生理的欲求は最も基本的な欲求で、人間はこれを最優先して満たそうとする。
③生理的欲求以外の４つの欲求は、それよりも下層の欲求が満たされてから出現する傾向があるが、例外もある。

なお、生理的欲求とは、「衣」「食」「住」でたとえると、「食」の欲求のようである。また、「安全・安定の欲求」とは、「衣」と「住」の欲求のようである。

［3］リストカットへの含意

自分の手首を傷つける「リストカット」は、心理学者や精神医学者が得意とする領域であろう。リストカットについて社会学的に論じるとしたら、どのようなことが可能なのであろうか。いつもそんなことに悩みながら、臨床社会学の講義でリストカットのテーマに相対してきた。そんななか、土井隆義の『友だち地獄』[9]がひとつの大きな示唆を与えてくれた[10]。もうひとつは、マズローの欲求階層説だ。

マズローの欲求階層説がリストカットを考えるうえで示唆を持っていることに気づいたきっかけは、数年前に放映されたテレビドラマ（服部泰平原作、君塚良一脚本『ずっと会いたかった』フジテレビ）であった。

そのテレビドラマのあらすじは以下のとおりだ。主人

公の中年男性（松本幸四郎役）は、会社にリストラされて、職探しの最中であるが、リストラされたことを妻子に言えず、会社に行くふりをしてアルバイトと求職にでかけている。大学生になる息子はひきこもりになり、大学に行けなくなってから何年か経過しようとしている。主人公は、アルバイトも首になり、求職活動にも行き詰まり、息子への対応にも行き詰まったときに、息子が小さかったときにでかけた家族旅行でみつけた不思議な瓶のことを思い出す。その瓶は、海岸に流れ着いていたもので、当時小学生だった息子が見つけた。中には何やら手紙のようなものが入っている。その瓶を見つけたときは中身を一度あけたものの、その瓶は部屋の片隅に忘れられ、置かれてきた。主人公は、ふとそれをあけてみようかという気になり、その瓶を探し出して中をあけてみると、やはり入っていたのは手紙であった。宛名は「雪子様」、差し出し人は「瑞鶴」という航空母艦の乗船者であった。主人公は、この手紙を差出人もしくは宛先へ急に届けたくなり、開封しないまま、衝動的に家出をしてこの手紙の配達人になる。その手紙の出所を探し当てるなかでいろいろなことがわかってくる。差出人は海軍予備少尉ですでに戦死しており、宛先は、差出人の新妻であった。その手紙は、その海軍予備少尉が戦地でもはや絶命の危機のときに書いたもので、それが漂流して何年も後に主人公の息子の手に流れ着いたのだった。最後には、主人公はガンで絶命寸前の「新妻」に会うことができ、その手紙を渡せることになる。その手紙の宛名になっている「新妻」は、夫の戦死がわかると旧家の嫁ぎ先から追い出され、一人で働きながら夫が帰ってくることをひたすら信じ、何十年も待ちわびてきた。絶命寸前の病室にやってきた主人公を戦地から帰ってきた夫と思い、既に年老いた「新妻」は安心して息をひきとる。このあらすじの途中で、ひきこもりの息子がリストカットをするシーンが出てくる。

このドラマをテレビで見たときは、とても感動したものの、リストカットの講義との接点など思いつくはずもなく、そのまま良質作品として手持ち作品リストに入れて、私は何回も見ていた。ところが何回もみるうちに、おそらく戦中で命がいつ奪われるかわからないときには、リストカットなどは起きないだろうな、との思いがわきあがってきた。

リストカットについての私が参照した事例書や研究書など[11]によれば、リストカットは、自殺の手段ではなく、大多数のひとは「生きるためにリストカットをしている」[12]。リストカットは「生きているか死んでいるかわからない状態を打ち破る手段だ」[13]。そういえば、このテレビドラマの主人公も、「配達人」として家出をする直前に自分の気持ちを「生きているか死んでいるかはっきりしない」と表現していた。もっとも主人公はドラマのなかでリストカットをしていたわけではないが。

リストカットについてのこれらの議論に接していると、超時代的にリストカットが存在しているような気がしてくる。ところが、このドラマを見ていると、リストカットが存在するのは、かなり時代的制約を受けそうに思えてくる。少なくとも、自分の命がいつ奪われるかわからない時代には、リストカットは起きないであろう。このように思うようになって、この作品をリストカットの講義で紹介するようになった。上記の私の思いは、このドラマを見てもらった受講生にはかなり支持してもらえるものだった。この支持には一定程度の重みがある。私が臨床社会学の講義でリストカットのテーマをとりあげるようになってから既に約10年ほどになるが、受講生の限りで言っても、リストカット体験者、もしくは知人にリストカット体験者がいる学生は、着実に増えている。2010年度の臨床社会学受講生については、自らがリストカット体験者である学生と、自分は体験者ではないが知人に体験者がいる学生とを合わせると、その数は臨床社会学受講生の半数以上となる。つまり、リストカットについては、かなり「詳しい」学生たちが私の「リストカットの時代的制約説」に同意を示してくれているわけだ。

ところが、しばらくして、マズローの欲求階層説との接点を考えられるようになると、上記の私の思いがもっと鮮明に説明づけられるような気になった。リストカットをする人たちに多く接してきたロブ＠大月によれば、「他人から見て羨むような人生であっても、必ずしも本人が納得してきた人生とは限らない。物質的には満たされていながら、必ずしも本人が納得してきた人生とは限らない」[14]。リストカットをする人たちは、おそらくマズローの欲求階層の第3層以上の欲求（『所属・愛情の欲求』『承認・尊重の欲求』『自己実現の欲求』）が満たされていない人たちであろう。マズローによれば、マズローの欲求階層の最下層の欲求（『生理的欲求』）や第2層の欲求（『安全・安定の欲求』）の実現が厳しいような戦時下では、最下層や第2層の欲求の実現が優先されることが示唆されるので、その時代にはリストカットは起きにくいことが理論的に推測可能になる。

臨床社会学の平成22年度の講義では、総合福祉学科の学生よりも心理学科の学生のほうが圧倒的多数であったが、マズローの話を関連付けながら上記の話をしてみると、特に心理学科の学生からはかなりの好意的反応が

あった。

マズローの欲求階層説をリストカットに応用してみると、リストカットをある程度社会学的に眺めることが可能になる。それは、リストカットが起きる時代的制約が明らかになるからだ。この点は、私が知っている限りのリストカットに関する文献[11]には指摘されていないことのように思われる。

世は平和な時代になった。しかし、平和な時代に生きる大半の人たちがリストカットをしているわけではない。平和な時代とて、自分の生活が成り立つかどうか悪戦苦闘している人にとっては、衣食住の確保で四苦八苦しているわけであるから、マズローの欲求階層の最下層もしくは第２層の欲求実現は危うい状態である。子どもを抱えて少ない給料で何とか生活をしていこうと格闘している親たちがその例だ。そのような人はおそらくリストカットはしないであろう。そういえば、ロブ@大月によれば、「リストカットをする人の多くは、現在 17 歳～ 24 歳の女性」[15]である。また、「リストカットをする人のほとんどは、小さいときから金銭的には何不自由なく過ごし、高学歴の持ち主だ」[16]。リストカットをする人たちは、マズローのいう最下層や第２層の欲求実現のために自分が奮闘しなくても親や配偶者によってそれらが実現されている人たちなのではないか。

［4］ホームレスへの含意

平成 21 年度までの臨床社会学の講義でもホームレスのテーマを扱ってきたが、それまではホームレスのテーマをマズローの欲求階層説との関連で私は考えてこなかった。平成 22 年度の臨床社会学の講義からは、ホームレスのテーマでもマズローの欲求階層説との関連を意識して講義ができるようになった。

マズローの欲求階層説を意識せずとも、ホームレスのテーマについて既存の諸業績[17]をもとに私が主要論点としてきたのは、以下のとおりである。

①自分がホームレスになる可能性は、学生が思っている以上にあり得る。
②アルバイトやフリーターができるのは、住む家があるから、親が健在であるから、自分が若いから、などの大前提があるからである。
③非正規雇用・派遣社員の増加によってホームレスは以前よりも学生にとって身近になりつつある。いわゆる「ネットカフェ難民」の出現はその前兆である。
④大半のホームレスは仕事をしたいと思っているが、仕事にあぶれているのだ。家がなくなると仕事も確保できなくなる、仕事が確保できないと家も確保できなくなる、という悪循環のなかにホームレスたちがいる。

マズローの欲求階層説との関連でホームレスのテーマを眺めてみると、あらたな発見が出てくる。それを以下で６点にわたって眺めてみよう。

(1) ホームレスはマズローの欲求階層の第１層、第２層の欲求充足にかかわる問題であること

私が勤務校の臨床社会学の講義で現在扱っている題材は、「同性愛」「アルコール依存症」「ドメスティックバイオレンス」「リストカット」「摂食障害」「自殺」「ホームレス」である。これまではどのテーマも私の中では同じような次元で並んでいたが、マズローの欲求階層説に接してみると、この７テーマのうち「ホームレス」だけがマズローの欲求階層の第２層以下の欲求充足にかかわり、その他は主として第３層以上の欲求充足にかかわる問題であることに気づく。「摂食障害」は第１層の欲求充足にかかわるものではあるが、引き起こす要因的なものは第３層以上の欲求充足にかかわるように思われる。

ホームレスたちは、住む家が確保できていない。それゆえ彼らは普通の生活が成り立つような仕事の確保もままならない。仕事を確保すること、住む家を確保することは、マズローの欲求階層の第１層と第２層の欲求を充足するための確保だ。

(2) マズローの欲求階層の第１層と第２層の欲求が充足されないと、それより上層にかかわる悩みなど成立できないかもしれないこと

私が臨床社会学の講義で扱っている上記の７つのテーマのうち、「ホームレス」のテーマは学生にとって最も自分と疎遠なテーマだと感じられているようだ。もっとも、アメリカのリーマンショックに端を発した不況により、４年生は就職活動のたいへんさを特に実感しているため、その意味では４年生はホームレスについても自分との関連を他学年の学生よりは意識することがあるが、それでもそれは「万が一」の可能性であるようだ。他の６つのテーマについては、学生たちは、個人差はあるものの、どれかに自分とのかかわりを見いだせる場合がある。しかし、それらの問題は、ホームレスとは違って、原則として第１層と第２層の欲求が充足できていることを前提に出てくる問題であることに学生たちは気づいていない。

(3) マズローの欲求階層の第１層、第２層の欲求が充足できているのは親のおかげであること、そのことの重大

さ・大変さに気づいてほしいこと

先の７テーマのうち臨床社会学の受講生である学生たちが自分との関連でもっとも疎遠だと思っているのが「ホームレス」のテーマであると上記で述べたが、それは、自分たちが親によって衣食住の欲求が満たされているのだということの重大さを学生たちは充分には認識していないということも意味している。また、衣食住を確保することの大変さについての認識も同様だ。４年生は特に就職には非常な関心を持っているが、それでも、いざとなればアルバイトもでき、フリーターでも生きて行け、選びさえしなければ何らかの仕事にはありつける、と思っている。

しかしその認識は甘いようだ。それはホームレスと呼ばれている人たちやネットカフェ難民と呼ばれている人たちが陥っている落とし穴から推察可能だ。確かに親が健在ならば、そして自分が 20 代であれば、アルバイトで食いつなげるかもしれない。ただ、アルバイトができるのは、ひとつは親が健在であることと、若さという年齢に守られているからである。親が背後にいるから雇うほうは安心して雇い入れられる。もし親が居なくなるか、住居を失った場合には、アルバイトといえど、できるかどうかはとたんに厳しくなるはずだ。家が確保できない人は仕事も確保できない。仕事が決まらない人は家も確保できない。それは、ホームレスたちが陥る悪循環の始まりだ。

水島宏明[18]によれば、「マンガ喫茶」と呼ばれているインターネットカフェに「宿泊」する「ネットカフェ難民」と呼ばれている人たちのなかに、いわゆる派遣社員のうち「登録型」の中の日雇い仕事をしている人たちがいる。彼らは、住居がなくても仕事にありつけるが、その仕事もいつもあるわけではない。彼らは、毎日派遣会社に電話を入れて、仕事の有無を確認し、仕事がある場合には仕事先に向かう。それとて、仕事場についたとたんにキャンセルを言い渡されることもあり、その場合にはそこまでの交通費負担も自前となる。そんな不定期な仕事ゆえ、アパートを借りるお金もたまらず、彼らは仕方なく安価で宿泊も可能なネットカフェ（マンガ喫茶）で寝起きすることになる。そのような不定期仕事すら、40 代になると激減するとのことだ。

(4) マズローの欲求階層の第１層、第２層の欲求を充足をしていくために、社会保険の最低限の知識は身につけて仕事選びをしてほしいこと

衣食住を確保する上で、社会保険はひじょうに役に立つ。社会保険とは、年金保険、医療保険、雇用保険、労働者災害補償保険などのことだ。通常、アルバイトと呼ばれる仕事では、これらの保険に保障されるための保険料支払いが給料から天引きされない一方で、これらの保険による保障はない。ネットカフェ難民は、病気になった場合、親の医療保険の扶養家族になっていなければ、医療保険が使えないため、医者にかかりづらくなる。医療保険が使えないと、医療費を全額支払わなければならなくなるため、若者の場合、自己負担医療費は通常の３倍となる。たとえば３千円の医療費自己負担で済むところが医療費の窓口支払いは９千円になるわけだ。アルバイトを含むかなりの非正規雇用は、これらの保険が不備である。会社の都合で首を切られても、雇用保険が完備されていなければ、次の仕事を探す間、それまでの給料に代わる給付金も雇用保険から支給されなくなる。仕事中にけがをした人は、労働者災害補償保険による補償が受けられず、万が一、仕事のために命を落としても、いわゆる「労災」の補償が受けられない。アルバイトは気軽だが、このような落とし穴があることを学生たちは全くと言ってよいほどわかっていない。

衣食住を確保することとは、マズローの言う欲求階層の第１層と第２層の欲求を満たすことになるわけだが、それをより確実にするための各種社会保険の知識を学生たちに持ってもらいたい。総合福祉学科の学生たちは、社会保険の学習を含む「社会保障」が必修授業となっているので心理学科の学生たちよりははるかに社会保険に敏感ではあるが、それでもまだ社会に出ていない学生が大半のため、社会保険の必要性や大切さについての実感はいまひとつだろう。親たちの大半は、知識の大小はあるとはいえ、給料から保険料が天引きされることもあり、それら社会保険については学生たちよりははるかに関心を持っているし、実際に活用もしているはずだ。

［５］同性愛（研究）への含意

マズローの欲求階層説によれば、愛情欲求は欲求階層の第３層に属する。かつて私は、「結婚したゲイ男性から見える光景」という小論[19]のなかで以下で述べる話題に触れた。そこで整理されたことは、マズローの欲求階層説に引きつけてみると、ひとつの説明がつく。

大学生時代、私は自分の性的性向に気づき、悶々としていた。父が家を建て替え、私の部屋を用意してくれたときも、私は欲求階層の第３層以上の欲求が満たされずに、父の意向に沿うことができなかった。そのときの私は、自分の部屋を用意してもらえることよりも大事なことがあると思っていた。自分の性向にどう対処したらよいのか、自分はどのような進路に進んだらよいのか、私

は模索の最中だった。喜ぶ様子を見せない私に父はとても落胆して「張り合いがないな」とつぶやいた。しかし、今思えば、私が自分の性向や進路をめぐって思いをめぐらせることができたのは、父によって欲求階層の第１層や第２層の欲求が満たされていたからだ。ただ、当時の私はそれに気づけなかった。

自分が結婚し、家庭を持ってみると、第１層や第２層の欲求を家族が満たせるようにすることがどれほどたいへんなことかを思い知らされることになる。自分だけの生活だけではなく家族を背負いながら衣食住の欲求を満たしていくことのたいへんさを私は思い知ったわけである。

我が家が破産の危機に立たされたとき、私は同性愛の研究どころではないと思えた。まず生きていけるかどうか、住むところが確保できるかどうかで四苦八苦した。当時はそのことがどういうことなのかを理解できなかったが、マズローの欲求階層説に接してみると、事態が整理可能だ。同性愛の研究は、私の欲求階層でいえば、第３層以上の欲求を満足させる行為だろう。しかし、破産の危機に立たされて衣食住の確保が危うくなり、マズローの欲求階層の第１層、第２層の欲求を満たすことが危うい場合には、その欲求を満たそうと自分が奔走するようになり、第３層以上の欲求充足は後回しにせざるを得なくなるわけだ。ただし、それは、大学教員としての私の責務が「同性愛の研究」を進めることだけに限られていないから言えることだが。

［６］相談業務としてのカウンセラーとソーシャルワーカーとの違い

臨床社会学の授業は、これまでも触れたとおり、本学では、総合福祉学科のほかに心理学科でも開講されているため、受講生は両学科の学生たちとなる。

2010 年度の臨床社会学の授業では、特に、両学科の学生たちの多くが「相談者」としての仕事を希望していることを意識して私は授業を行った。これまでも漠然となながら、ソーシャルワーカーとカウンセラーとの違いを頭に入れながら講義してきたつもりであるが、マズローの欲求階層説を特に意識して授業をしてみると、両相談業務の違いが今までよりも鮮明に感じられるようになった。

心理学科の学生は、臨床心理士を代表格とするカウンセラーが行う相談業務を志向している。総合福祉学科の学生は、社会福祉士や精神保健福祉士などのソーシャルワーカーが行う相談業務を志向している。相談業務という点では両者は共通しているが、両者の違いはいくつかある。

これまで私が意識していた違いだが、利用者が抱える問題を「個人的問題」ととらえるか「社会的問題」ととらえるかの志向の違いがあるように思われる。カウンセラーは心理学が基盤にあるので、利用者が抱える問題を「個人的問題」として掘り下げていくことが得意なようにおもわれる。一方のソーシャルワーカーは、社会学や社会福祉学の志向がより強いように思われ、利用者が抱える問題を「社会的問題」としてもとらえる目を持てるように思われる。

マズローの欲求階層説を意識してみると、カウンセラーは、欲求階層の第３層以上の欲求充足に関与する仕事を行うように思われる。ソーシャルワーカーは、社会福祉制度の知識を持つことが要求され、衣食住が満たされていない人を対象とした相談業務が多くなるように思われる。ソーシャルワーカーは、社会福祉制度の知識を活用して、衣食住が満たされていない人たちにそれが満たされるように支援をしていくわけだ。もっとも、ソーシャルワーカーも、第３層以上の欲求充足のための相談も行っていくが、カウンセラーが持ち合わせていない社会福祉制度の知識という装備を活用できる。一方のカウンセラーは、カウンセリングのための心理学的知識によりたけているわけだ。

［７］終わりに

マズローの欲求階層説についての他の研究者による諸論文を充分吟味することもせずに、さしでがましいことを書いてしまったかもしれないが、一応これはこれでそれなりの意味があると私は思っている。心理学の門外漢が勝手なことを語っているゆえの問題点はいくつかあろうが、その点の克服は今後の課題としてゆきたい。ただし、マズローの欲求階層説と臨床社会学とを結びつけて論じたものは私が知る限りではまだないようだ。

［註］

1. マズローの欲求階層説のそもそもの原著は 1943 年に *Psychological Review* 50 号に掲載された "A theory of human motivation" であることを同僚の心理学研究者である岡本香から教示を受けた。
2. A.H. マズロー（小口忠彦訳）『（改訂新版）人間性の心理学－モチベーションとパーソナリティ』産業能率大学出版部、1987。
3. フランク・ゴーブル（小口忠彦訳）『マズローの心理学』産業能率大学出版部、1972。
4. 社会福祉士養成講座編集委員会編『心理学理論と心理学的支援－心理学』中央法規出版、 2009、36 頁。
5. 前掲書、36 ～ 37 頁。ただし、５つの欲求には、どれがそれ

であるかをわかりやすくする ように私が『』を付した。
6. 前掲書、37 頁。
7. 前掲書、37 頁。
8. 前掲書、37 頁。
9. 土井隆義『友だち地獄－「空気を読む」世代のサバイバル』筑摩書房、2008。
10. 小高良友「今どきの若者を理解する」、『東海学院大学紀要』第 3 号、2009、55-60 頁。
11. 小田晋『リストカット－手首を切る少女たち』二見書房、2000。ロブ@大月『リストカットシンドローム』ワニブックス、2000。M.A.ｱﾘｼｱ･ｸﾗｰｸ（水澤都加佐監訳）『なぜ自分を傷つけるのか』大月書店、2005。
12. ロブ@大月、前掲書、14-15 頁。
13. ロブ@大月、前掲書、 6 頁。
14. ロブ@大月、前掲書、13 頁。
15. ロブ@大月、前掲書、14 頁。
16. ロブ@大月、前掲書、13 頁。
17. 岩田正美『ホームレス／現代社会／福祉国家－生きていく場所をめぐって』明石書店、 2000。森田洋司編『落層－野宿に生きる』日本経済新聞社、2001。青木秀夫編『場所をあけろ！－寄せ場／ホームレスの社会学』松籟社、1999。藤井克彦・田巻松雄『偏見から共生へ－名古屋・ホームレス問題を考える』風媒社、2003。狩谷あゆみ編『不埒な希望－ホームレス／寄せ場をめぐる社会学』松籟社、2006。
18. 水島宏明『ネットカフェ難民と貧困ニッポン』日本テレビ放送、2007、100 頁、131 頁、 141 頁など。
19. 小高良友「結婚したゲイ男性から見える光景」、『東海学院大学紀要』第 2 号、2008、61-65 頁。